

平成31年3月1日
定時制生徒会誌「僚星」

秋田県立本荘高等学校 校長 今井 智幸

考える力は、よりよく生きる力

ある全国紙の読者の欄に掲載されていた、東京都に住む14歳の女子中学生と思われる方の投稿です。タイトルは、「人生はつらい でも人に優しく」です。

人生はつらい。

9対1の割合でつらいことの方が多い。

でも、前を向いて歩けばそれが8対2になるかもしれない。もしかしたら、5対5になるかもしれない。いや、1対9になるかもしれない。

どんなに嫌な人がいても、その人に優しく接すること。すごく酷いことを言われたり、されたりしたら無視すればいい。その人が将来大人になったときに、友だちから嫌われてすごく嫌な目にあうだろう。

今までに人に優しく接した分、人から好かれ、良い思いをする。

人生はそんなもんさ。

人生は楽しんだもの勝ち。

ありのままの自分で運命のままに生きれば最高に楽しい人生になる。

人は死んだらどうなるかわからない。でも、今の自分でいられるのは1度だけ。だから、人生を楽しんで！

朝日新聞「声 voice」2018.10.5

「人生はつらい。」から始まります。中学2年生か、3年生の14歳の中学生が、そう考えるようになった体験などを、読者はつい考えてしまいます。日本は、周囲のピア・プレッシャー（同調圧力）が強い社会とされています。自分に素直に「ありのままに」生きることを大切にしている投稿者は、「すごく酷いことを言われたり、されたりした」つらい経験があったのかもしれませんが、でも、人に優しく接し、分かりあえ、楽しく過ごした経験もあったのでしょう。そんな体験から、どんなにつらい時でも前を向いて歩き、人には優しく接することが大切だという学びが生まれています。また、中学高校の自我確立期は、多感で感受性も豊かになります。特に、感受性が強く、問題意識をもつ中学生は、うれしいことにも敏感ですが、友人関係も含め、様々なことがつらく感じられることも少なくない時期です。でも、様々なことに好奇心や関心をもち、ものごとを考える力は、よりよく生きるためのすぐれた資質・能力となります。

人は誰もが、限られた時間を生きる一回性の存在であることへのまなざしもあります。だから、つらい思いを抱えている同世代の人たちに、たった一度の「人生を楽しんで！」と、最後に呼びかけます。自分への確認のようにも見えます。ここでの人生は、中学時代に限ったものではなく、将来にわたる人の生です。その呼びかけは、今の時代に生きづらさを感じ、日常の日々に追われている大人にも響く言葉となっています。